災害に地方私大はどのように対応したのかー熊本学園大学の事例

2026 年 8 月 4 日（火）慶応義塾経済研究所ワークショップ

慶応義塾大学西校舎 1 階 514 教室

報告者　幸田亮一

熊本学園大学商学部シニア客員教授・熊本学園大学元学長（2014～2020 年）

はじめに

学校法人熊本学園熊本学園大学

母体は熊本海外協会

熊本出身の国会議員の運動に細川家の協力、済々黌人脈

1942 年 東洋語学専門学校　建学の精神：自由闊達・師弟同行・全学一家

1945 年 熊本語学専門学校　1950 年 熊本短期大学 1954 年 熊本商科大学

初代学長 高橋守雄（熊本出身、第 7 代熊本市長、各県知事、第 34 代警視総監）

1994 年 熊本学園大学

２初期対応からボランティア活動へ

4 月 14 日 近隣住民が避難、14 号館を開放

4 月 16 日 避難者急増、多数の車中泊（最大時、一般 700 名、障がい者 60 名、車中泊 100 名）

学生・教職員の安否確認　　建物損壊調査（１、２、３号館甚大被害）

休講措置、研究費・出張費の執行一時停止

国会議員などの来学対応（木原実さん、河田悌一さん他）　学生授業料減免、補助金への対応

5 月 9 日（月）授業再開

5 月 28 日（土）最後の避難者を見送り、避難所を閉所

ボランティア活動の支援

震災直後は学生が自主的に各地で活動

震災２週間後ころより組織だった活動を開始

福島大学うつくしまふくしま未来支援センターの天野和彦さんの助言

6 月 6 日 ボランティアセンター準備室を設置

明治学院大ボランティアコーディネーターの市川享子さんの助言

6 つのボランティア組織を中心に支援

おひさまカフェ、くまがく応援隊スマイリア、熊本マシマシ計画、チームライフ、社福学生災害ボランティアグループ、KGU futsa

災害時デマへの対応・・・サイバー防犯ボランティア

３自主的な福祉避難所運営

14 号館避難所 教職員学生一丸となって救済支援
災害弱者をも受け入れ　→ 「熊本学園大学モデル」
被災した教職員・学生がボランティアに
社会福祉学部と水俣学研究センターの役割大
学生ボランティアは食事の世話からトイレ掃除まで奮闘

避難所運営の 4 原則
どなたでもどうぞ、管理はしないが配慮はする、無意味な調査はおこなわない、
必要とする人がいる限り大学の都合で閉じない

2011 年の東日本大震災の時に作ったビブス
6〜7 名の学生を 1 グループにして、1 週間単位で仙台に、半年間派遣
倉庫に保管していたものを熊本地震で着用

学生の成長　ボランティア・授業・アルバイト

熊本学園大学の過去の経験
白川大水害（1953 年）の対応
ハンセン病未感染児童通学拒否問題（1953 年）の対応―高橋学長と鰐淵（熊本大）学長の協力

熊本学園大学水俣学研究センター
1999 年 原田正純先生の着任により「水俣学」の提唱
目的 「負の遺産としての公害、水俣病を未来に活かす」
2005 年 4 月　水俣学研究センター設立
2005〜2009 年度　文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業
2010 年度　私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
『水俣学研究』『水俣学ブックレット』など多数の出版物
内外の研究者との連携

４コロナ禍への対応

初期対応―３密対策、災害対策本部の設置、休校措置、海外留学生帰国、LMS による遠隔授業
コロナ禍の影響→学生のボランティア活動が中断

おわりに

教職員・学生・地域が一体となった復旧活動
卒業生ネットワーク
なぜ、非常時に自主的対応ができたのか？　→　私学の建学の精神の発揮